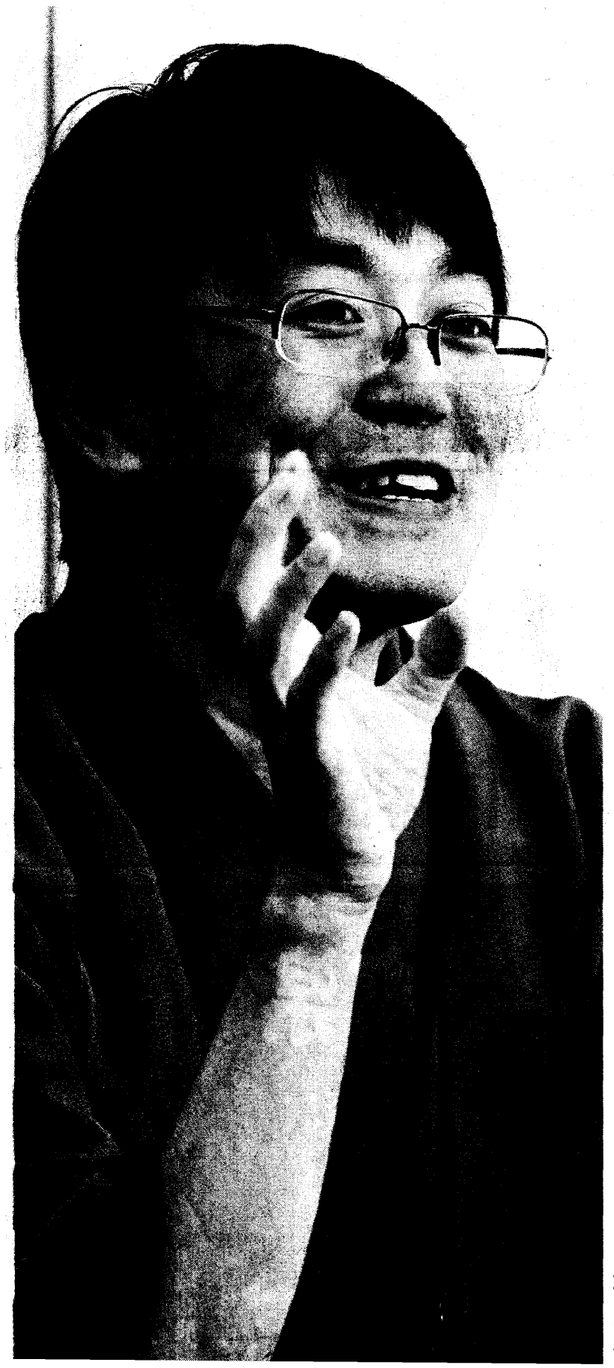
羽生善治棋聖

予想を超えたスピードで激変する世界経済。難局を乗り切るための一手を語る羽生棋聖と経済評論家の勝間さん。危機的状況に直面しても萎縮せず、変えるべきところは変え、冷静に先を見極めて積極的にアクセルを踏むべきだ―と元気だ
（早坂洋祐撮影）

意識的にアクセル踏もう 成長の糧



■パパも育児休暇

――男と女は役割も違うじゃないですか

勝間　そこがまさしくパラダイムシフトを起こさなければいけないところです。日本では100の家事・育児があった場合、女性が87・5をやってるんです。つまり1対7です。一方、全世界的な平均は大体1対2です。日本の女性にとって育児経験はものすごく悪いんですね。だから、子供を産まないか、産んだとしても1人で精いっぱい、ごめんなさいという話になってしまう。

羽生　育児経験が悪いってどういうことですか。

勝間　孤独なんですよ。誰も助けてくれない。1人でもういやになっちゃうんですよ。羽生さんは家事は。

羽生　家事は全くしないです。限りなくゼロです。なにもしません。

勝間　確かに、仕事をフルタイムでやって、その上、育児、家事は勘弁してくれというのは本音だと思います。男性側の仕事の負荷が軽くならないと。今提案してるのは「パパクオータ―」という制度で、育児休暇を男性が強制的に取るものです。実際に育児、家事を体験してもらえば奥さんの大変さもわかるだろうという発想です。

羽生　現状ではすぐに労働時間の削減は難しいですよね。

勝間　EUのように「残業を含めて週48時間以内にしましょう」という指針があれば随分変わりますよ。

羽生　確かに、それをしないと、なかなか現実のものとならないかもしれません。日本が豊かになったことは間違いないんですけど、ヨーロッパのような基盤の部分からの全体的な豊かさはまだ実感できてない。どうしても、一生懸命働き続けていかなければ支えることができないという気もします。

■新発想 若者から

――国全体が豊かというか、中間層が厚いというか

羽生　私、欧州へチェスの大会へ行くと、すごくそれ感じるんですよ。普通10日間ぐらいの大会で1日1試合。ということは、参加してる人は10日間全部仕事を休んでる。日本で将棋の大会で「10日間ぶっ続けでやりますから参加してください」といったら、誰も参加しないですよ。豊かさの一つのリトマス試験紙のようですが、アメリカでは5日間で1日2試合する。

勝間　日本は1日3試合、3日間だったりして。

羽生　それこそ土日祝日とかも入れて。今の日本で、普通に勤めている人たちが、「じゃ、私ちょっとこれから2週間休暇取ります」とか、「1カ月失礼します」とかというのがぼこぼこ出てきたときに、社会が成り立つのかどうか。

――日本の企業ですから

羽生　でつまり、そこは今の若いれというのがあはすごくしていしたいとか、偉そういう欲っていいというようなような気がしま

勝間　人口トがなうとしてもなか

■長期的な視点を

――こうしたピンチの年は変化のチャンスかもしれません

羽生　気をつけなければならないのは、状況が厳しい時は、すぐに結果を求めてしまいがちになることです。将棋の世界でも、今白星が欲しいと思うと、勝つ可能性が高いほうに行ってしまう。リスクの高い何かをやるのではなく、安全策を取る。学べば学ぶほど、知れば知るほど、うまくいかなかったときが頭をよぎり、自然にアクセルを踏まずにブレーキを踏んでしまう。しかし、成長するためには意識的にかなり強めにアクセルを踏み続けるぐらいの感じでちょうどいいのかもしれない。

――萎縮してはいけない

勝間　そうです長期的な視点がある。例えば、私に即効性のあるもて、即効性のある治家だけ当選させて当然、即効性のあたくなりますよ。は何の根本解決にもから、長期的な視点あって、そのために、もっと勉強しな

――子供も大人もば。さて、今年はどのでしょうか

勝間　いろんなの見直しがす。貧困や教育対て、結局どういう社作らなければいけと企業のバランスの抜本的な見直しがます。

羽生　ものすなると思っ

大きな危機だから 底力が出る